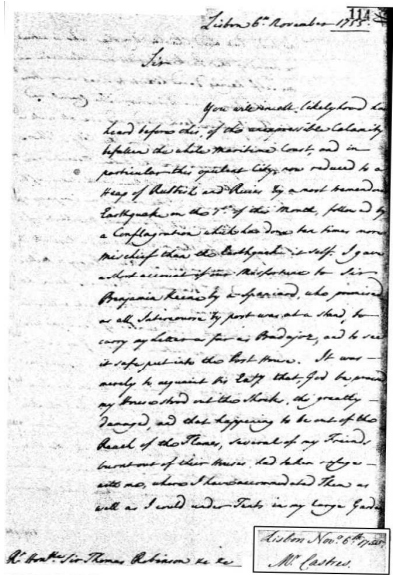


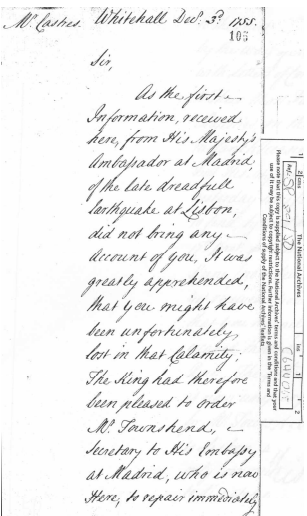
論文二の五

ポルトガル在留英国大使カストレスの震災通信



〔上図〕震災第一報を誌した英国大使カストレスの公用至急便。
英国宮廷へは十二月二日に到着。

十一月六日に発送し、



〔下図〕カストレスの報告を受けた南方国務省長官ファックスの十二月三日付訓令。
ポルトガルへの支援助物資とともに英国艦隊に護衛され、十二月二日リスボンに到着

(いずれの草稿も英国国立古文書館に所蔵)

ポルトガル駐在の英国大使としてアブラハム・カストレスが一七四九年リスボンに着任した翌年専制君主ジョアン五世が逝去し、ジョゼ一世が即位した。カストレスの前任者ベンジャミン・キーンは、議会政治を確立した宰相ウォルポールに篤く信頼され、植民地争奪をめぐるスペインとの拮抗のなかで戦争の回避に尽力し、ポルトガルとの友好やイギリス商館の発展を促進した。^①

かねてポルトガルの国家財政は窮迫の一途を辿り、ジョアン五世の晩年には三百万スタターリングの負債に及んで、英葡の通商関係も緊張の度を深めつつあった。こうした状況のもとで新王は、セバステイアン・デ・カルヴァーリョ・イ・メロ、のちのボンバル侯爵を外務担当の國務尚書に登用する。ロンドン駐在の公使としてイギリスの歴史と国情をつぶさに学んだボンバルは、他国への従属の打破と経済の抜本的改革の必要を痛感する。彼の進言によってまもなく砂糖精製のマニユファクチュアが設置され、絹織物の生産業者に免税等の特権が賦与された。^② イギリスの貿易政策との対決こそ改革の核心であることを、彼は備忘録に左記のとおり記している。

▽王室は窒息の極みにある。イギリスがこの国を従属状態に堅く縛りつけている。彼らは征服者の危険もなくここを征服し、拘束をみずから断ち切る力を剥奪したまま、彼らの政治的軍馬にこの民族を連結させている。
▽国家間に一定の法が定められたとしても、最強者の法がねに世界を支配するであろう。現代のある偉大な詩人が語るように、最初の王者は運に恵まれた兵士であった。

▽大英帝国の方式は自国の力を増強するため、他国の力を衰弱させるところにある。

^① Rose Macaulay, *They went to Portugal*, London, 1985, p. 281.

^② Conde de Camota, *The Marquis of Pombal*, London, 1871, pp.17, 29, 34-35.

▽ポルトガルはこれまで力能と氣力を欠き、あらゆる活動がイギリスの意向に規制されていた。^①

経済改革への重要な布石として一七五五年ボンバルは、商業評議会の設置に着手する。この組織は産業の根幹であるブルジョアジーの育成を目的とし、商業、工業、海運、貿易などの監査や認可を権限とするものである。イギリス通商への羨望や反感から多くのポルトガル人がこの政策に賛同することは明らかである。同年五月年リスボン港近くの路上でイギリス人の鞆が押し開かれ、一杯に積み込まれた銀延棒が発見された。官憲の取り調べによって、イギリス商館の数名から船便で国外へ送るよう委託されたものと判明する。従来とは異なつてポルトガルの法廷はこれに有罪の判決を下し、銀延棒を没収した。これに対してイギリスが使節を派遣して抗議し、以後判決の撤回を求めて両国間の紛糾がながく続く。^②

とはいえ、この年大使カストレスはリスボン遷都五百年を記念する新春の祝賀や五月の新オペラ劇場こけら落しにも列席し、夏季の園遊会では商館の幹部たちもボンバルと歓談や会食を共にした。カストレスの邸宅は河岸から比較的離れ、現在のポムバル侯広場近く、サンタ・マルタ街に位置した。十月二十日彼は本国への通信で「当地においてとくに問題はなし」と誌している。^③

カストレスの邸宅は倒壊を免れ、多くの罹災者がそこに避難し、献身的な庇護を受ける。商館付司祭のウイリアムソンも幹部数名とともに身を寄せが、オランダ閣僚一族の身勝手な振舞にはキーン宛の私信で憤懣を漏し

^① Reflections of Pombal, dans Camota, *op.cit.*, London, 1871, p.43.

^② Shillington and Chapman, *op.cit.*, pp. 260-263.

金七紀男著、前掲、一五七—一五八頁。

^③ Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*, p.47-49, 60, 118.

ている。キーン自身も商館の全面的な破壊、親しかった貿易商の遭難に深い悲しみを表わした。全般的な恐慌状態のなかで、カステルスは十一月六日委細な震災報告を急送したが、通信網の途絶により英国宮廷への到着は大幅に遅滞する。その間九月下旬からロンドンの定期刊行物はリスボンにおける大震災を報し始め、そこではイギリス使節の死亡説も流れた。ロンドンにおける震災第一報とこの災害をめぐるイギリス王室の対応について、『ジエントルマンズ・マガジン』一七五五年十一月号における同月二九日付記事を訳出する。

リスボンで今月一日午前九時に発生したきわめて怖るべき地震について確認の通信が届いた。約八時間続いた地震によって、壮麗な首都の公共建造物と家屋居館の大半が破壊され、十万人以上が瓦礫の下に生き埋めとなつた。こうした地獄絵に加えて、

首都の数カ所で地底から噴出した火炎が、残余の地域を焼き尽し、最端から最端まで、フランスとスペインへの出発港にまで燃え広がった。国王、王妃、王室全員は王宮の倒壊直前に脱出された。スペイン大使と身内の九名は瓦礫のもつて死去された（七歳のひとり息子は無事）。また、有能な貿易商数名とともにイギリス領事が同じ運命に陥つたのではないかと憂慮される。なぜなら、宮廷や当局がこの災厄に関する報告をいまだ受け取らないからである。

言語に絶する災害の報告に陛下は強く心を動かされ、当初からの艱苦を慰藉するため、持参可能な金子を携えた通信使を毎日ポルトガル王宮へ派遣された。また、スペイン国境の税関すべてに対しいかなる義務をも免除して、あらゆる種類の必要品の輸入を許可すること、そしてポルトガル臣民も能うかぎりこれに協力することを命じられた。①

① *The Gentleman's Magazine*, November 1755, pp.521-522.

当代の英国国王ジョージ二世は神聖ローマ帝国ハノーヴァー選帝侯の子息としてドイツで育ち、父ジョージ一世の即位に伴ってイギリスへ移住した。かつてオーストリア継承戦争デッティンゲンの戦いで国王は連合軍の陣頭指揮に立ち、フランス軍を撃破したが、絵図に残る英姿もこのときは七四歳の高齢にあった。名譽革命ののちイギリスではウォポールの長期政権を経て、議会制度が定着し、とくに下院は国王の権力を制約する機能を担っている。一七五四年から初代ニューカッスル公爵が宰相の座に就き、イングランド南部、南ヨーロッパ、北米等を管轄する南方国務省の長官は、おりしもアメリカにおける英西の緊張激化を受けて、トマス・ロビンソンからヘンリー・フォックスに交代したばかりであった。

リスボンの大震災はスペイン駐在大使キーンをとおり英国宮廷に急報され、これを受けてジョージ二世は議会への親書でポルトガル支援を要請する。上下両院は十一月二六日満場一致でこれを可決し、十二月一日国王はポルトガル君主への見舞状をフランス語で起草した。

親愛なるわが朋友よ！貴国の首都を襲った怖るべき地震とより凄惨な大火について、マドリッド宮廷に駐する英国大使からの報知を深甚なる悲哀をもって受け入れました。とはいえ、神慮によって陛下の聖なる御身と王室ご一同が難を免れたことは、全ヨーロッパにとって大きな慰藉となるであろう。遍く荒墟のなかで陛下の臣民が無数に歿したと知り、余がいかに悲しんだかは表現できません。脱出した人々の悲惨な状況も聞き及んでおりません。

陛下がこうした重圧に耐えられるよう祈ります。あらゆる方策での救援とあらゆる種類の物資を遅滞なく差し伸べるよう、我が国の議会に命じました。英国国王が陛下の至福を祈願することを「ご確信ください。」

我らの真摯で完璧な友情を確認させるため、神はこの悲しい機会を授けられたのでしょうか。

これを受けて宰相ニューカッスル公爵はロンドンの公邸にポルトガル支援の緊急会議を招集し、多大の通貨ちようと必要物資を現地へ輸送するよう英国海軍に命令した。この会議には財務長官リットトンや南方国務省長官フォクスなど政府要人とともにビュレルら四名の貿易商も出席した。なお、この危機にポルトガルの住民をバリバリ海寇の掠奪から防衛することも、軍艦数艘に命じられた。②

他方マドリッドでは十一月十九日英国大使キーン、地震発生の数日後に綴られたカストレスの私信を受け取った。大使の報告によって英国宮廷はようやく十二月二日カストレスの生存を確認する。③ その直後カストレス自身による南方国務省長官トーマス・ロビンソン宛至急便も、再開されたバケット使でようやく到着し、同月英国政府の官報『ロンドン・ガゼット』に全文が掲載された。この公文書は『ジェントルマンズ・マガジン』など一般誌にも転載され、のちには教科書にも収録等にも転載される。古来英国においてもっとも広く読まれた震災証言のひとつと言えよう。

① Mark Molesky, *This Gulf of Fire, the destruction of Lisbon or Apocalypse in the Age of science and Reason*.

New York, 2015, pp.239-240.

② *Ibid.*, pp.238-239.

③ *Whitehall Evening Post*, 2 to 4 december, 1755, p1.
Paice, *op.cit.*, pp.146-147.

ポルトガル駐在英国大使カステルスの十一月六日付公用至急便

リスボン、一七五五年十一月六日

ポルトガル国王六の全権大使

アブラハム・カストレス

南方国務省長官トーマス・ロビンソン卿殿

拜啓。すでに当然お耳に達したと存じますが、今月一日の激烈な地震に伴って言語に絶する災厄が、海岸部全域を襲うとともに、とりわけこの富裕な都を塵芥と瓦礫の山に変え、それに続く大火は地震自体に比し十倍もの惨状を惹き起しました。ベンジャミン・キーヌ卿にはスペイン人を介して手短かに報告し、閣下は私の書簡をバダジョウズまで送るならかの通信手段を考え、それが駅舎まで支障なく届くよう見守ることを約束されました。閣下にお伝えしたいのは、拙宅は大きな被害を受けたものの、神の恵みによって、損傷を受けたものの、倒壊を免れたことです。また偶々火災の及ばないところにあつて、焼け出された数名の友人がこゝへ避難しました。わが家の広い庭園にテントを張り、彼らとできるだけ一緒に過したのです。そのとき定期船にあつたチャールズ・ダグラスは別として、専属牧師と私自身のほかは震災の日以降はだれも家の中で眠ろうとしません。

領事とその家族も救出され、首都近郊の田舎の屋敷でみな無事です。現在私のところにいるのは、オランダの閣僚と彼に連れ添う夫人、子ども三人、召使七、八人です。そのほか私と行動を共にするより幸運な人々には、イギリス商館の数名が含まれ、彼らのほとんどは所有する一切を失いました。ただし、プリ夫人やメリスブ夫人、レイノンド氏やビュレル氏などは自宅で現金の全部か一部を運良く護れました。死者と負傷者の数を正確にはまだ計算できません。当地における私たちの戸数を考えると、弱体である我らの商館はその点に関して美

事に切り抜けました。

私は親密で貴重な友人、スペイン大使を喪いました。彼は街路へ避難しようと焦り、ドアの下で打ち砕かれました。そのため以後五日間苦悶に沈みましたが、知己である高貴なだれそれが不慮の事態となり、即座に陰鬱な悲報が届いたのです。こうした方々は、大抵極度に消耗され、私もとくに心を痛めておりました。しかし、臣民のなかでより下層で惨めな人々は、パンを求めてとりわけ私のもとへ押し寄せ、妻子とともに庭園のなかであちこちと横臥します。したがって、私はこれまで彼らを助け、この問題に関してポンバル氏が発せられた法令のとおり、貯えが消えぬかぎり、今後も続行する所存です。

私たちの不運のひとつはイギリスの軍人もオランダの軍人もいないことです。大工と船員はこの際大いに役立ち、拙宅の補修を助けてくれました。これまで晴朗であった天候に関しては、激しい降雨の恐れがあり、庭園に避難する人たちはこれをながく避けることができません。屋内に彼らのためどう部屋を工面するか、途方に暮れています。なぜなら、大半の室床が足元でぐらつくので、新たな入居者も支えるには弱すぎるのです。

最初の数日は街道が遮断され、ようやく昨日ド・ラ・カルメット氏に伴われ、光栄にもペエレンにあられるポルトガル国王と王室の皆様を拜謁致しました。王宮のどこも避難に適さず、ご一家はテンドで過ごされています。このたびみずから蒙られた被害が甚大であり、王都が完全に壊滅したにもかかわらず、国王は予期したよりも平静に対応されました。そして、国王とご親族の命が救われたのを摂理に感謝すること、また無事である私たちを見て、喜びに堪えぬことなどを話されました。王妃と若い王女たちからも私たちの参内について直々に感謝の言葉を頂きました。ただし、テントで寝起きし、晴着もないので、いまは個人的な挨拶に止めたいと申されました。

ロンドンの貿易業者三、四人が出立に向けて手配し、商館の主要な家族はほぼイギリスへの航路をすでに確保しました。当初の数日耐え続けた疲労困憊と極度の苦悩が多少とも過ぎれば、すぐに私はより貧しい階層が帰国できるまで、ルトガルの老朽船か、それができなければ、イギリスの船舶を雇って、彼らを収容するなんらかの方途を考えたいと思います。ここに留まるのを望む者も多く、彼らは自宅に残したと思う僅かな現金を、瓦礫のなかにすこしでも発見するのを願うのです。

この三日間強盗や殺人という事件が頻発し、それらを防ぐため適切な法令が公布されました。街には脱走兵が群がり、悪業の好機を狙っています。貯蓄のある幸運な同国人から現金を預り、私の家に多額な金銭を置いたままで、昨日は夜通し無法者に囲まれたため、ポンバル殿に警護をお願いしたものの、残念ながら断られました。

現在の悲惨な状況においてなにを為すことが最善であるかを思案するために、分散した我らの商館の会合を一両日中に拙宅で開く予定です。安全をほとんど保障されないこの沿岸に、私はできるかぎりながく留まり、困窮する人々の声が届くところに身を置くとつもりです。また、それについてさきほど協議したのですが、高名なヘイ氏も同じ対応を決意されたようです。

あれこれ助言や庇護を求める多くの困窮者に次々と囲まれ、この書簡が乱雑になったことを、なにとぞお赦しください。イギリスからだれか来るか、軍人がここに立ち寄るまで、この小包は商館に留め置かれます。イギリスへ行く商船がいくつかあり、その第一号でそちらに運ばれるはずですが、忘れてはいけませんが、ヘンリー・フラン克蘭ドご夫妻も無事でお元気であるとお伝え致します。

敬具。

カストレスのロビンソン宛至急便が到着した翌日、新任の南方国務省長官フォックスがこれに応答し、新たな訓令の輸送は、ポルトガル国王への見舞状や救援の物資とともに英国艦隊に託された。

南方国務省長官フォックスの十二月三日付カストレス宛訓令

ホワイトホール、一七五五年十二月三日

カストレス殿

リスボンにおけるさきの凄絶な地震に関して、マドリッド駐在英國大使より本宮廷に届いた報告には、貴下の消息について言及がなく、不幸にも震災で歿したのではないかと、いたく憂慮したところである。それゆえ国王陛下におかれては、ロンドンへ帰省中であるタウンセンド、マドリッド駐在の英國大使館書記官が、不慮の受難を悲しく深厚なる陛下の見舞状を携え、マドリッドを経由してポルトガル宮廷へ出向するよう命じられた。とはいえ、カストレスご自身からの報告がなお届かぬ昨日、僥倖にも貴下が全般的な破滅を免れたことを陛下はベンジャミン・キーン卿の先月十七日付書簡によって確信され、タウンセンド殿のポルトガル出向をもはや無用とされることともに、ポルトガルの国王・王妃への見舞状を貴下への訓令に同封するよう余輩に指示された。したがっ

① Abraham Castres, letters to Robinson of the 6th november 1755. TNA (The National Archives of the United Kingdom) Manuscripts SP89/50

The London Gazette, 9 to 13 december, 1755, pp.11.

The Gentleman's Magazine, December 1755, pp.556-558.

て、貴下はこれを拝受して真摯なるポルトガル国王に謁見を願ひ、震災への見舞状を差し上げるとともに、英国国王からの確乎たる友誼と尊敬を伝えて頂きたい。また、両国の同盟を重視され、首都リスボンおよびポルトガル王国の艱苦を憂慮され国王陛下は、英国議會へ親書を送られ、ポルトガルにすむ英葡両国の国民を急ぎ救援するよう強く要請され、満場一致でこれが議決された。かくして陛下の命により、同封する目録のとおり正貨五万ポンドとともに大量の多様な生活物資が、ポルトガルの国務尚書を宛先として急送され、王権の統制のもとで配分される手筈である。正貨とともに生活物資の一部は一兩日のうちに英国軍艦に搭載し、ロンドンから出航する予定であり、貴下には本訓令の複写および救援の目録が届くはずである。なお、王命によって国務尚書カルヴァリヨ閣下宛に余輩が綴った書簡もこの便に託される。なお、今次の震災に関するきわめて精密なる報告、すなわち犠牲者と思われる英国国民の総数および氏名一覧をマドリッド経由で即刻送信し、さらには激動する状況について迅速で不断の情報の日々怠らず届けるよう、国王陛下は要望される。

貴下が無事であるとの知らせに、慈愛深き陛下がとりわけ喜悅されたこと、また国務における貴下の精励と深慮にかねて感服する廷臣すべてを安堵させたことを、余輩も愁眉を開きつつ、末筆ながら伝えたい。

貴下とその家族が無事であることは、(リスボン総領事)ヘイ殿がご親族へ送られた書簡にも誌されており、それをも陛下がおおいに喜悅されたことを、御意として彼に伝えて頂きたい。総領事が罹災を免れことによって、英国とポルトガルの通商関係は多大の恩沢に浴するであらう。

敬具。①

ポルトガル駐在大使と南方国務省との往復書簡手稿は、英国国立古文書館に保存され、ここにはカストレス発信の文書として震災第一報のほか、十一月十九日および二十日の簡略な報告も含まれる。これらの宛先として

① Henry Fox, letter to Castres of the 3 december 1755. TNA Manus. SP89/50 C644065.

長官の前任者ロンビンソンの名が記され、カステルスはなお宮廷からの反応なしに執筆のものであろう。彼の手稿はかなり読解困難であるが、フォックスの訓令を受けた最初の報告を試訳する。

カストレス 一七五五年十二月二四日付フォックス宛報告

リスボン、一七五五年十二月二四日

拝復。

十二月二一日日曜の午前九時より十時までの時刻に、閣下の同月三日付至急便と同封の書類若干を携えて、当地へ使者が到着しました。・・・おりしも十一月一日の大地震以来もつとも強烈な余震が・・・

・・・かくして光栄にも再度ベレンの仮設御所(テント小屋)へ参ずるよう招かれ、英国国王の名代としてポルトガル国王に拝謁して親書を提出し、欣然たるご応答を頂きました。すなわち、今次の暗鬱な震災に際して、ポルトガル国王とご一家に対する朋友英国国王と友邦英国の友情および敬愛を確信するのは無用であるが、英国国王から寄せられた交誼と配慮は従来あまた実感するところである、と。また、震災に襲われたポルトガル国民の艱苦に英国の国王と国民から憐憫の情が寄せられたことに深く感銘するとともに、あらためて英国国王への友情と敬愛を堅持し、両王家の緊密な団結と完璧な理解が幸福かつ永久に持続すべく、あらゆる方途でつねに尽力したい、と。①

英国海軍の護衛と輸送によってカストレスへの訓令とともに、ポルトガル国王への見舞状と救援の財貨・物資も届けられた。右の説明文と積荷一覧は宰相宰相ニューカッスルのもとで作成されたであろう。

① Castres, letters to Fox of the 24th december 1755. TNA Manus SP89/50 C644067.

受理した悲惨な報告を受けて、国王陛下が深甚なる悲嘆を表明すること、悲運のポルトガル国民のみならず、われらの艱苦する同胞、すなわち当地で在留したり、商易するイギリス国民を全面的に支援すべきこと、さらに高遠な人類愛と深い憐憫の情によって 国王陛下が適切と判断される規模において、惨憺たる震災による窮状を緩和できるよう、第一次の支援物資を贈ることが、イギリス下院において満場一致で可決された。英国陛下がポルトガル宮廷へ寄贈すべく、リスボン宛てに船積みした支援物資の目録をここに提示する。

ポルトガル通貨 三〇万クルザード
スペイン銀貨 二〇〇デイタ
牛肉 六千バリ
バター 四千デイタ
ビスケット 千袋
米 千二〇〇デイタ
小麦粉 千二〇〇キント
小麦 三千三三三モイヨ

①

ポルトガルへの救援に取り組む英国政界の動向は、他の国々へもいち早く伝えられた。大地震による艱苦に比較的冷淡と表されるフランス王権であったが、パリの伝統ある情報誌『ガゼッタ』にはロンドンから最新の情報が掲載される。

① Arquivo da Torre de Tombo. Papeis varios, tom. II, no. 229, in Sousa, *op. cit.*, p.534.